

読んで得する暑さ対策と問題点

カタログ発送のご案内をいたします

今年の菊づくりは猛暑に見舞われ、根ぐされ、枯死、下葉の黄化など様々な生育不良が発生しました。その影響は非常に大きく、順調に生育した方とそうではなかった方との差は予想以上でした。

日々の質問から伺い知ることができます。

当社の土と肥料のみお使いの方は、大きな失敗は少なく、背丈の伸びが悪い程度であり、秋には挽回の出来る程度に止まっています。

「菊づくりを始めて今年が最高の出来映え」と言ってきた方も少なからずあります。

一方「半分枯れた」「盆養がダルマになってしまった」などと言ってきた方も多くいました。

思うように育たなかった皆様に詳しい話を聞くと、培養土の自作派、他社の乾燥肥料や液肥を中心に使用している方が圧倒的に多いこともわかっています。

自作培養土の問題点は“発酵不足で充分に腐熟してない腐葉土の使用”による根ぐされ、根いたみの発生が主な原因です。

菊づくりでは生育後半でも葉っぱの形が残るほど粗い腐葉土を好んで使用する方もおりますが“粗い”と言うことは未熟と言うことであり、植えた後にも鉢の中で発酵が続くこととなります。

タンニンなどの生育阻害物質を鉢の中で放出し続ける為、根いたみ、根ぐされの原因を作り出しています。

夏の暑さが厳しさを増す近年、発酵する速度が早まり短時間で多くの生育阻害物質が放出されることとなります。

“今までは良かったけど…”これは通用しなくなりました。

未発酵の乾燥肥料も未熟の腐葉土と同じように施肥した後に鉢の中で発酵が始まり、そのガスにより、根ぐされ、根いたみが起きてしまいます。(有機質肥料は施す前に発酵しておくことが絶対的な条件です)

さらに化学肥料の問題があります。

固形や液体がありますが、これらの肥料を主に使用すれば「葉っぱがドス黒くなる」「曲げると割れそうなほど硬くなる」「葉っぱが垂れ下がったり巻き込む」

など見映えを悪くするのみではなく茎葉に未消化のチッ素分をため込み「花卉が暴れる」「花卉の伸びが悪くなり、大きな花にならない」など問題が発生する為、優秀花の咲かない原因を作り出してしまいます。

また化学肥料は人為的に配合した肥料要素しか含まれていない為、植物の生長に必要な一部の肥料要素しか含まれていません。そこで肥料要素不足による下葉の黄化などの生理障害の原因を作り出してしまいます。

培養土の完成時には微生物が活発に働く最上の土となっても化学肥料を使い続けると微生物の栄養源となる有機物(=有機肥料)が不足し増殖や働きが著しく低下してしまいます。

そこで菊(植物)の健全生育を促す微生物特有の栄養分であるアミノ酸、ビタミン、ミネラル、酵素、生長ホルモン等々の分泌が低下し活力ある生育はしなくなってしまう。

さらに土が固くしまり、排水性や通気性など土の物理性が損なわれ、酸欠状態に陥ってしまいます。そこで根の活力低下による水や栄養分の吸収が悪化し生長力や草勢の低下となり生育不良に進んでしまいます。(元気がない、イキイキと育たない)

こうした土や肥料では暑さに対する抵抗性は極めて低くなり、暑さに対する影響を直接受けてしまい生育不良という大きな問題に発展してしまいます。

温暖化が進む菊づくり(植物栽培)に於いては、こうした最も基礎となる“培養土づくり”“肥料の選び方”は極めて重要な位置づけとなってきます。

上記で述べたことは他社資材との差別化をすることが目的ではなく、今年のように失敗が多く、思うように菊づくりができないと菊づくりを断念する愛好家が現れてしまう危機感を覚えざるを得ません。

純粋に菊づくりの観点から生育不良や障害発生の原因を理論的に突き詰めた結果であり“失敗無く力強い生育をし美しく雄大な花を咲かせるにはどうしたら良いかの結論です。また菊づくりの普及にも寄与するものであると考えています。